のび太の45年間

ダテ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

原作に贅肉つけてる感じのお話です。

《参考作品》

・てんとう虫コミックスドラえもん１８巻「あの日あの時あのダルマ」

・てんとう虫コミックスドラえもん２５巻「のび太の結婚前夜」

・てんとう虫コミックスドラえもんプラス５巻「４５年後……」

・てんとう虫コミックスドラえもん２０巻「雪山のロマンス」

・てんとう虫コミックスドラえもん４巻「おばあちゃんのおもいで」

目　次

のび太の45年間 ―――― 1
Snow Magic Fantasy ～雪山のロマンス An other world story～ ―――― 18
おばあちゃんのおもいで ―――― 30

のび太の４５年間

《ねぇのびちゃん。ダルマさんてえらいね》
《なんべんころんでも、泣かないでおきるものね》
《のびちゃんも、ダルマさんみたいになってくれるとうれしいな》
《ころんでもころんでも、ひとりでおっきできる強い子になってくれると……》
《おばあちゃん、とっても安心なんだけどな》
「……っ!?」
「……夢……か」
（会社帰りの電車の中、いつの間にか眠っていたみたいだ）
（夢を見るのも久し振りだ）
（本当に昔の、僕が小学校に上がる少し前のおばあちゃんとの思い出だ）
（大学を卒業し、僕はなんとか仕事に就いた）
（今は、毎日上司にこっぴどく怒られながら必死になって働いてる。正直、押し潰れそうだ）
（こんな時あいつが居たら、この暗い心も少しは晴れたのだろうか）
（僕が小学４年生の時に突如として現れて、事あるごとに僕を助けてくれたあいつは、今はもういない）
（時空法に触れたとか、セワシくんの身に何かが起きたとか別にそういう理由では無い）
《もう君は、僕が居なくても大丈夫みたいだ》
（あいつがそう言ったのは、僕の大学の合格通知が来た２日後のことだった）
（あいつと一緒にいた時間は長かったような短かったような……）
（もしかしたら夢や幻だったのかもしれない）
「ただいま」
「あら、おかえりのび太。パパはまだだから、ご飯はもう少し待っててね。先お風呂にしちゃう？」
「うん、そうするよ」

（ようやく家に帰り、自室へ入る）
（いつも通り、今日もこっぴどく上司に怒られた）
（いつも通りだからといって、怒られるのに慣れる訳じゃない）
（むしろどんどんキツくなってくる）
「……そういえば」
（ふと思い出した。あいつが帰るときに残していったもの）
「あった……これだ」
（押入れの奥で埃を被っていた金属製の小さい箱）
（中に入っているのは、四角柱が直角に折れたような形をしている、変わった形の電話）
《きっともう君は、僕がいなくても1人で進んでいける。辛いことがあっても耐えていける。君をそうする為に僕はこの時代に来たんだから》
《だけどどうしても、どうしても辛いことがあって、助けて欲しいことがあったらこれを使うんだ》
《いつもみたいにこれに向かって泣きついてくれればいい》
《僕にしか繋がらない、僕直通のタイム電話だ》
《僕がどこで何をしていても、これが掛かってきたらすぐに駆け付けてやる》
《だけど、この電話は一度だけしか使えない。本当に助けて欲しい時にだけ使うんだ》
《それが……その時が、僕が君を助けてやれる最後の機会だ》
「一度だけ、か」
（僕はあの時、あいつに言ったんだ。1人でも大丈夫だって）
（それに、あいつも言ってくれた。もう、僕1人でも進んでいけるって）
（この程度で挫けるなんてだめだ。上司に怒られたくらいで呼ばれたら、あいつも呆れてしまうだろう）
（この電話のことは忘れてしまおう）
（そうだ、父さんが帰ってくる前に風呂に入らなきゃ）
（そうして僕は、タイム電話を押入れの奥底にしまい込んだ）

「僕らのアイドルだったしずちゃん……」
「とうとうのび太のものになるのか」
「うらやましいぞ。こいつ!!」
（結婚式を翌日に控えた今日、ジャイアンの家で前夜祭が開かれている）
（ジャイアン、スネ夫、出木杉、そしてしずちゃん。小、中、高と同じ学校だった）
（流石に大学も同じって訳には行かなかったけど、何かあればこんなふうに連んでいた。所謂腐れ縁ってやつなんだろう）
（でもそのお陰で、会社で嫌なことがあった時もなんとか乗り越えてくることができた）
（他人から見れば虐められていたんじゃないかと思われるかもしれないけど、僕にとっては昔から、大切で掛け替えのない友達だ）
「もし、しずちゃんを泣かせでもしたら、俺が承知しねえ」
「幸せにしてあげてくれよな、のび太くん」
「わかってるわかってる。どうもありがとう」
（酒が入ってることもあるのだろう、緩む頬を抑えることができない）
（僕らのアイドルで、何より僕の生き甲斐ともいえる存在。僕が今まで生きてこれた理由）
（僕にこの先何があったとしても、絶対に最後まで守り抜きたいと思えるそんな相手と、これからの人生を共に歩んでいける）
（今までに経験したことがないほどの幸福感でいっぱいだ）
《あの嬉しそうな顔》
《まるっきり締まりがなくなってる》
「……ん？」
「おい、どうしたのび太。今日は祝いだ！飲めや歌え！」
「そうだよのび太くん。我ら青春の思い出のために！」
「う、うん……そうだ、そうだね。よーし、今日はみんな寝かさないよ！」
「よっ、のび太！そうこなくっちゃ！」

（一瞬、懐かしい声が聞こえた気がするけど、きっと空耳だろう）
（あまり飲んだ感じもしないけど、かなり酔いが回ってるみたいだ）
（だけど、今日くらいこんな日があってもいいだろう）
（こんなに素晴らしい友人達に結婚を祝って貰ってるんだ）
（今日と明日は、人生で一番幸せな日になりそうだ）

ピンポーン
（インターホンが鳴った、誰かが来たみたいだ）
（自分の家のインターホンが鳴っているはずなのに、随分と音が遠いな……）
（正直、動くのも億劫だ。知らない人だったら居留守を使おう）
（そう思ってインターホンの画面を見ると、それはよく見知った顔だった）
（あまり人には会いたくないが、こいつら相手だったら、もしかしたら少しは気分が晴れるかもしれない）
「入ってくれ、玄関は開いてる」
（マイクに向かってそう言ったあと、マンションのエントランスのオートロックを解除する）
（そして再びリビングのイスに腰掛ける）
（あれからしばらく、会社は休んでいる）
（事情が事情だから許されているとはいえ、いい加減仕事に戻らなければ）
（頭ではわかっているのに、体も心も動くことができない）
「のび太……」
「ああ、ジャイアン、スネ夫……。まあ、座ってくれよ」
「あ、ああ……」
（ジャイアンとスネ夫が入って来たことに全く気がつかなかった）
（それに、人と会うのも久し振りだ）
「あれから、もう1ヶ月たったんだな」
「……」
「……」

（ずっと黙っていた、というより、どう切り出せばいいのか迷っていた2人が話しやすいように会話を切り出してみた）
（それでも2人は迷っているようだ）
（でも、それだけ僕のことを心配して気遣ってくれているってことだ。それだけで救われる）
「まあ、聞いてるとは思うけどさ……っ……」
（どうしても、この後に続く2文字が口から出てこない）
（その単語を発した瞬間、僕はそれを、その事実を認めることになる）
（認めたくなんかない。認めてしまったら本当に何かが終わってしまう気がして）
（だけど、認めなくちゃ、事実を受け入れなくっちゃ前に進むこともできない）
（大きく深呼吸をして、震える喉を押さえつける）
「……即死、だったみたいだな」
（その言葉を発した瞬間、ジャイアンとスネ夫の表情が歪むのが見えた）
「のっのび太はさっ……」
「いいんだスネ夫、僕だってわかってはいるんだよ」
（何かを言いかけたスネ夫をわざと遮る）
「分かってるんだよ、僕がいくら否定したところで現実は覆らない。静香が戻ってくるわけじゃない。だから、いつまでも落ち込んでちゃダメなんだって」
（頭では分かってるのに、心と体が全く言うことを聞かない。だけど……）
「だけど、今日2人に会えてよかった。2人の顔見たら少し気が楽になったよ。どうしても僕1人じゃ出掛ける気力が出なかったから、本当に来てくれてありがとう、2人とも」
（静香を喪った今、僕の心にはポッカリと穴が空いている。そしてこの穴はきっと、今後永久に埋まることはないだろう）
（でも、穴を塞いでしまうことはできるかもしれない）
（その方法が今、ジャイアンとスネ夫に会えたことで見出せたかもし

れない）
「のび太、俺はバカだから、なんて言葉をかけたらいいのか全く分かんねえ。どう励ませばいいのか全く見当もつかねえ。俺のすべきことが分かんねえ。だから、何か俺たちにできることがあったらなんでも言ってくれ。俺たちは親友だ、心の友だ。そうだろ、スネ夫？」
「うん、そうだよ、ジャイアンの言う通りさ。心の友は支え合って生きていくもんさ！」
「ジャイアン……スネ夫……。ああ、ありがとう」
（穴は塞いだだけで、埋まるわけじゃない）
（だから、僕の中からこの悲しみが消えることはないのだろうけど、この親友達のお陰で、この悲しさや辛さを覆い隠すことができそうだ）
（明日から会社、行ってみるか）

「はあ、こんな時がくるなんてな……」
（ついこの前小学校に上がったかと思えば、大学を卒業して、ついには結婚まで……）
（本当に、時が経つのは早いもんだ）
（親の贔屓目抜きにしてもノビスケは本当にいい奴に育った）
（そして、本当に良い奥さんを見つけてくれて安心した）
（ただ、息子の成長を君と見ることができなかったこと、それだけが心残りだよ……）
（……さて、ノビスケ達が居ないうちに押入れの整理でもしてしまおうか）
（おっ、これはノビスケが小さい頃の……）
（こっちはの成人式の時の……）
「ん、これは……」
（押入れの中のものを引っ張り出していくうちに、一番奥で埃をかぶっていた金属製の箱を見つける）
「んー？こんなものあったかな……」
（どこか見覚えがある箱。多少のデジャブを感じながら蓋を開けて見る）

「……思い出した。タイム電話だ」
（あの時あいつが僕に残していってくれた唯一のひみつ道具）
（そうか、あいつがいなくなってからもう３５年以上経ってるのか）
（昔は本当に色々あったけど、どこを切り取ってもとても充実した日々を送っていたような気がする）
（夢のような日々だった）
《だけどどうしても、どうしても辛いことがあって、助けて欲しいことがあったらこれを使うんだ》
《いつもみたいにこれに向かって泣きついてくれればいい》
《僕にしか繋がらない、僕直通のタイム電話だ》
《僕がどこで何をしていても、これが掛かってきたらすぐに駆け付けてやる》
《だけど、この電話は一度だけしか使えない。本当に助けて欲しい時にだけ使うんだ》
《それが……その時が、僕が君を助けてやれる最後の機会だ》
（あいつ、５０代も半分を過ぎた僕を見たらなんて言うんだろうな）
（最後の機会……）
（別に助けて欲しいことがあるわけでは無いけど、そうだな……古い友人にただ会いたいだけってお願いでも良いかもしれない）
（助けてもらえる最後の機会でそんなこと頼んだら笑われるかもしれないけど）
（そう思いつつ、タイム電話の着信ボタンを押してから耳にスピーカー部分を当てる）
　プルルルル……
（かなり日付が経ってたから動くかどうか心配だったけど、さすがは未来の道具だ）
　プルルルル……
（あいつは出てくれるだろうか）
　プルルルル……
（もし出てくれたら、最初になんて言ってくれるんだろう）
　プルルルル……

（昔と変わらない声で、変わらずに名前を呼びかけてくれるだろうか）
ガチャッ
「あっ、も、もしもし、僕、のび太だけどっ……」
（自分でも気がつかないくらい興奮していたらしい。繋がったことにビックリして色々と順序を間違えてしまった気がする）
『やあ、お祖父さん。久し振り』
「……え？」
（記憶の中のあいつの声とは全く違う声に戸惑う）
（というか、僕の記憶の中で僕のことを祖父扱いする人は1人しかいない）
「もしかして……セワシくんかい？」
『大正解。久し振りだねお祖父さん』
（やっぱり、あいつを僕の元に送り出してくれた張本人だ）
（きっと未来の世界でもこちらと同じ分だけ時が経っているのだろう）
（つまり、電話の向こうのセワシくんとこちらの僕とでは年齢的な差はほぼ無いということだ）
「その……お祖父さんはやめてくれないかい？」
『なるほど、そういうことだね曾曾祖父さん』
「そういうことではないんだけど……」
（でも、セワシくんも元気そうでよかった）
（ただ、今はどうしても気になることがある）
「あのさ、セワシくん。このタイム電話なんだけどあいつに直通って……」
『うん……最後まで、最後の”最期”まで、確かに直通だった。でも、少し時間が経ち過ぎちゃったね』
「それって……」
（直接的な言及はなかったけど、セワシくんの言葉から導くことのできる結論は1つだ）
『うん、あいつはもういないよ。元々不良品だったのと、少し古い型だったのが問題でね、しょうがない部分もあるんだけどね』

「……そうなん、だ」
（セワシくんの言葉に、奥歯を噛みしめる）
（確かに、これだけの月日が経ったんだ。しかたがない部分もあるのかもしれない）
（でも、子供の時に同じ家に住んで、同じ飯を食べて、一緒にバカやったあいつとはもう会えないんだと思うと、やるせない気持ちになる）
『でも、この電話は本当に最期まで手放さなかったんだ。電話が来たら、僕が助けなくちゃって』
「……」
（自然と電話を握る手に力が入る）
（やり場のない憤りや悲しみ、その他諸々の感情が押し寄せてくる）
『あいつが壊れてから少し経った後に、あいつのポケットの中の物を整理していたんだ。そしたら、箱に入ったタイム電話と二枚の手紙を見つけた』
「……手紙？」
『そう、あいつからの最後の手紙。早速なんだけど、読んでもいいかい？』
「う、うん」
（あいつからの手紙……中身は気になるし、もう了承してしまったから聞くしかないけど、僕が聞いてもいい内容なんだろうか）
『じゃあ、読むね。
【　セワシくんへ。
　この手紙を見られてるってことは、僕はもういないんだろうね。
突然なんだけどセワシくん、君に2つ頼みがある。
まず1つ目。この手紙が入っている箱の中のタイム電話。これだけは、これがかかってくる時まで、処分しないで持っていてほしい。
　このタイム電話はのび太くんからしかかかってこない設定になってる。
　電話がかかってきた時はのび太くんが本当に困っている時のはずだ。だから、その時はのび太くんを助けてやってくれ。
　そして2つ目。電話がかかってきたら、2枚目の方に書いてある

のび太くんへの伝言を伝えてほしい。
僕の我儘でセワシくんには申し訳なく思う。
僕は君たちの周り、セワシくんのことを含めて心配事はなんにも無い。だからこの２２世紀に僕がいなくてもきっと大丈夫だ。
だけど、のび太くんのことだけが気がかりなんだ。だからのび太くんにタイム電話を渡した。タイム電話の存在を忘れてくれるのが一番いいのかもしれないんだけどね。
セワシくんなら分かってくれると思うけど、タイムテレビを見ればいいじゃんなんてツッコミはやめてくれよ？
本当はどちらとも、僕の手でやりたかったし僕の口からのび太くんに直接伝えたかった。
でも、それを果たすことがもう僕にはできない。
僕は君だけが頼りだ。
だから、セワシくん。のび太くんのこと、頼まれてくれ。】
ここまでが、僕宛の手紙だね』
「全く……心配しすぎなんだよあいつは。なんでセワシくんより僕のことを心配するんだよ」
（口ではそう発してしまうものの、少しだけ僕の頬が緩む）
（僕も忘れた事なんて一度もなかったけど、あいつも僕のことをちゃんと覚えててくれていたのだと思うと、心が暖かくなる）
（正直タイム電話の存在は忘れてたけど、もしかしたらそれもあいつの思惑だったのかもしれない。）
『あはは、でもそれはしょうがないじゃない。お祖父さんは勉強もダメ、運動もダメ、心配する要素しかなかったでしょ』
「否定はできないんだけどね……。そ、そんなことよりセワシくん、手紙、続きあるんだよね？」
（あいつがセワシくんに頼んだ、僕に伝えたかった伝言）
（あいつは僕に、なんて言葉をかけたかったんだろう）
『分かってる。ここからがお祖父さんへの手紙だよ。
【　のび太くんへ
のび太くん。この電話がかかってくる頃、きっと君は既に立派な

大人になっているんだろう。
そして多分、今君は僕の助けを必要としている。
僕は、子守用ロボットとして最後まで君の面倒を見たかった。
だから僕は君との最後の繋がりを作ったんだ。
それなのに、電話に出たのが僕じゃなくてごめんね。
そして、君のことを助けてやれなくてごめん。
だけど、これだけは覚えていて。
僕は、のび太くんの事を忘れた日なんてひと時もない。毎日毎日、君のことが心配で、君のことを想ってた。
君はアホでドジでのろまで、僕がいないと本当にダメなやつだったからね。
でも、君はもう大丈夫だろう。
だって、僕が壊れるこの瞬間まで君からの着信はなかったんだから。
君のことだから、全く問題なく人生を乗り切ってきたわけじゃないんだろ？
むしろ、人よりもたくさん転んで、でもその度に人よりたくさん起き上がってきたんだ。
だからきっと、君は人より強い。大丈夫。自信を持って。
もう、僕にはこんな言葉しか君に送ることができないんだ。
ダメダメな子守用ロボットでごめんな。
本当は電話が鳴ったらすぐに君の元に駆けつけて、成長した君と直接会ってたくさん話したかったんだ。
まあ、今更言ったってどうすることもできないんだけどね。
最後に僕からのび太くんに頼みがある。
いままで僕が君のことを散々助けてやってきたんだ。最後くらい僕の頼みを聞いてくれ。
のび太くん。どうか、幸せに生きてくれ。
僕には願うことしかできないけど、君なら叶えられるはずだ。
道のりが辛くても、最後には笑える人生を送ってくれ。
一方的な頼みで悪いけど、そうじゃないと僕、不幸な君を置いて

なんていけないよ。
それじゃあ、もうそろそろ書くスペースがなくなってきちゃったからこの辺にしておくね。
もっと色々なこと書きたいんだけど、ごめん、後1つだけ。
本当にこれが最後だ。
君と共に過ごした数年間、本当に楽しかった。あの日々は永遠に僕の宝物だ。
じゃあのび太くん。バイバイ。】
……そうだな、この手紙は後でお祖父さんの所に転送するよ』
「……うん、ありがとう」
（まったく、君は謝りすぎだよ）
（君が僕の元に来てくれなかったら、多分どこかで僕は折れていたんじゃないかと思う）
（ダメダメなんかじゃない）
（君は僕に生きるための力をくれたんだ）
（僕があの頃挫けずに成長できたのは、他の誰でもない君のおかげだ）
（だから君は、僕にとって最高の子守用ロボットだし、最高の親友だ）
（そんな親友からの頼みなんだから、僕は絶対に叶えるよ）
『さあ、お祖父さん、本題に入ろうか。あいつの願いでもあるしね』
「うーん、それなんだけどねぇ、今は特に何か困ってるわけではないんだよ」
『え、それじゃあなんで？』
「古い親友に、久しぶりに会いたくなったんだよ。でも、それは叶えることができなそうだ」
『ああ、そうだったんだ……。じゃあ、どうしようか。別の機会にする？』
（確かにそれもいいかもしれないけど……）
「いや、今お願いしてしまおうかな。セワシくんの方も、違う時代の人と接触を持つのはあまりよろしくないんだろう？」
『うーん、まあ、グレーゾーンっていうかほぼアウトに近いんだけどね。でも、お祖父さんはそれでいいの？』

「ああ、まったく問題ない」
『わかった。じゃあ早速お祖父さんの願いを聞かせてくれ』
「うーん、そうだな……」
（今でいいと言ったはいいけど、考えてなかったな……。どうしようか）
「……そうだ。言ってもいいかな、セワシくん」
『うん、なんでもどうぞ』
「タマシイム・マシンって道具、あっただろ？」

「ああ、ここだここ！」
（嫌なことがあった時、気分が落ち込んだ時、１人になりたい時、決まって僕はこの場所で寝そべっていた）
（今は、僕の通っていた学校は建て直されて元の姿は残っていないし、裏山ももうない）
（それに、僕の住んでいた町もすっかり変わってしまった）
（でも、４５年の歳月が経っても、案外体が覚えていてくれた）
「はあ、セワシくんに頼んでよかったな」
（家、昼寝用の座布団、マンガ、お菓子、そしておふくろ。）
（全てが懐かしい）
「ん、ちょっと待てよ……？」
（そういえば昔、同じようなことが……）
（そうだ、僕も４５年前に４５年後の僕に会っていたんだった）
（あの時の４５年後の僕が今の僕ってことか）
（……ということはもう少ししたら）
「あー！僕の場所に違う人がいる！」
（ああ、声変わりする前の懐かしい声だ）
「やあ、来たな。野比のび太くん」
（自分で自分に呼びかけるのはなんとも複雑な気分だ）
「どうだい、しっかり勉強してるかい」
「え、まあ……。いや、あんまり……」
「ははは。そうか、君が勉強してるわけないか。バカなこと聞いた」

（そうかそうか。僕は４５年前、こんな反応をしてたのか）
「あんた誰です？」
（４５年前の僕はどうやら気分を悪くしたらしい）
（確かに初対面のおじさんにそんなこと言われたら嫌な気分にもなるか）
（全てが昔に戻っているからなのか、昔抱いていたいたずら心のようなものが再び芽生え出してしまったみたいだ。悪いことしたな）
「分からない？４５年後のきみだよ」
「嘘だァ、僕がそんなおジンになるなんて!!」
「なにをいうか。誰だって年を取るんだぞ」
（さすがあいつと一緒に暮らしていただけのことはあるな）
（普通だったら未来の自分が来たと言われても、受け入れるまでに時間がかかりそうなものだけど）
（とはいえだ。この時の僕の頭はこんなにも弱かったのか……）
「お待ちどう。手元になかったので、２２世紀まで行ってきた」
「っ……！ド、ドラえもん……」
「やあ、のび太くん。きっと、君からしたら久し振りなんだろうね」
「あはは、そうだね。面倒かけて、悪かったね」
「ううん。未来のセワシくんと、何より君の願いだからね。まあ、４５年後のセワシくんから電話がかかって来た時はびっくりしたけどね」
（僕がセワシくんに頼んだこと。それは、少しの間昔に戻って、当時の自分と入れ替わりたいというものだ）
（タマシイム・マシンとか、人生やり直し機みたいな道具があることは覚えていたけど、僕は実際に昔に行ってみたいとセワシくんに頼んだ）
（そんなこと叶うのか分からなかったけど、セワシくんは僕のために色々と動いてくれた。この時代にいるドラえもんと連絡をつけるのが一番大変だったらしい）
「それにしても、君がこんなに立派に成長するとは。今ののび太からは考え付かないね」
「どういうことだ！」

（……ドラえもん）
（君からしたら全然そんなことはないのだろうけど、僕からしたら３０年以上ぶりの再会だ）
（気を抜けば涙が出てしまいそうだ）
「早速なんだけどいいかな、ドラえもん」
「ああ、そうだね。入れかえロープ」
（ドラえもんが取り出したのは、両端に玉のついたロープだった）
「ちょっとでいいから入れ替わりたいって」
「何のために？」
（確かに、小学４年生ならこんな気持ちになる事もないのかもしれないね）
「そうね、なんて言えばいいか……。遠い昔に読んだ本をもう一度読み返してみたい……、そんな気持ちかな」
「ふうん、いいよ、替わってあげる」
（あまりピンと来てないみたいだけど、断られなくてよかった）
（僕と４５年前の僕は片方ずつ、ロープの両端を掴む）
（すると体に電気が流れるような衝撃と共に、今まで見ていたはずの景色が変わる）
「ああ、なつかしいなあ。この体も、目線の高さも、周りの風景も、何もかも昔のままだ!!」
「当たり前でしょ、昔だもの」
（昔の僕から冷静なツッコミが入った気がするけど、そんなこと気にならない）
（ああ、どうしよう。すごく楽しいなぁ、これからどこへ行こうか）

「ああ、もう夜になっちゃったか……。ありがとう、今日はお陰で楽しかった」
（本当に濃密で楽しい１日だった）
（何十年振りに野球をやった。それも、４５年前のジャイアン達と一緒に）
（あいつらは僕の記憶の中のまんまだった。今はもうジャイアンもス

ネ夫もこの頃の元気は無くなってしまっているから、余計に懐かしかった）
（そして今日何より嬉しかったのが、静香に会えたことだ）
（嬉しさのあまり、昔の通り『しずちゃん』と呼んでみたり、この時代の静香が知らないことまで話してしまった）
（……でもそうか。君は今日、ノビスケが月にハネムーンに行ったことを知っていたんだね）
（君は今際の際で、どこまで思い出したんだろうな……）
（父さんも母さんも、この頃は本当に若くて元気だった）
（父さんはもう死んじゃったし、母さんも認知症が進行してしまって施設で暮らしている）
（４５年前に来て、改めて父母のありがたみを知ることができた）
（今日は本当に良い１日を過ごすことができた）
（セワシくんには感謝しなきゃな）
「のび太くん、君も今日はありがとう。何かお礼をしたいのだが……」
（いくら僕とはいえ、１日我儘に付き合わせてしまったからこのまま帰るというのも悪い気がするが……お？）
（ふと見た勉強机の上にはノートが置いてあった）
「そうだ、宿題でも手伝おうか」
「できるの？」
「この年で小学生の宿題ができなくてどうする」
（本人にはいえないけれど、これでも僕は大学を卒業してるんだ。小学生の問題くらいはできるはずだ）
「じゃあ……、ううん、いいよ、自分でやるから」
「さすがは僕だ！」
（４５年前の僕は驚くことに、一瞬迷ったようだけど、僕の手伝いを断った）
（それなら、僕にできることは１つだけだ）
「よし、それじゃあ１つだけ教えておこう。君はこれからも何度もつまずく。でも、その度に立ち直る強さも持ってるんだよ」
（自分で言うのもなんだが、この人生、嬉しかったことよりも悲しかっ

たこと、辛かったことの方が多かったように思える）
（それでも、何度も立ち上がって僕は生きてきた）
（そうか……）
（思い出した、思い出したよおばあちゃん。僕はきっと、あの時のおばあちゃんの言葉が心のどこかに残っていたんだ）
（そうだとしたらおばあちゃん、きっと僕はおばあちゃんの言うダルマになれたのかもしれない　）
「2人とも、今日は本当にありがとう。僕はそろそろ帰るね」
「うん！」
「元気でね」
（ドラえもん、静香、おばあちゃん。もうきっと、一生会うことのできない3人だけど、今でも僕を支え続けてくれている）
（この3人の思い出、そしてジャイアンやスネ夫、息子夫婦もいる）
（……うん、何も心配はいらないじゃないか）
（安心してくれよドラえもん。きっと僕は、幸せになるよ）

終わり

Ｓｎｏｗ　Ｍａｇｉｃ　Ｆａｎｔａｓｙ　～雪山のロマンス　Ａｎｏｔｈｅｒ　ｗｏｒｌｄ　ｓｔｏｒｙ～

「ああ、そういえば片付けの途中だったっけ……」
（４５年前から帰ってきて、家の惨状に思わず苦笑が漏れる）
（でもまあ、セワシ君は僕が４５年前に行った時間から１分後の世界に戻してくれたし、時間的な余裕は充分にあるな）
（少し疲れてるけど、ゆっくり片付けるか……）
（そう思いながら、１番近くにあった箱に手を伸ばした）
（箱の中には数冊の本が並んでいる）
「アルバムか……そういえばしばらく見てなかったな」
（適当に一冊取り出して表紙をめくると、始めにあったのは高校の卒業式の日の写真だった）
（僕と静香、ジャイアン、スネ夫、出木杉の５人で学校の校門の前で写っている）
（そういえば、高校卒業の時にはもうドラえもんは居なかったんだっけ……）
（その後、大学に入ったは良いけど単位はギリギリで、留年しないように必死だっな……）
（ああ、就職祝いのだ、この日はみんなで徹夜で酌み交わしたっけ……）
（ページをめくるごとに日付が進んでいく）
（不思議なものだ。写真を見ると、忘れていたと思っていた記憶が鮮明に蘇ってくる）
「……ん？」
（ページをめくる手が無意識に止まった）
「懐かしいなこれ……雪山から静香と降りてきた時のだ」

「ハックション！」
（頭が重い……これじゃ、一緒に行くのは無理かな……）
「はっきりしてよ。行くの？行かないの？」
「行きたいんだけどね……。坂道に弱くてねえ。平らな山ならいいんだけど……」
「はあ……。いいわよ、もう。他のお友達と行くから」
（しずちゃんに心配かけないように冗談めかして言ったつもりだったんだけどな……失敗だったか）
「ああ、ごめんよ！そんなに怒らないで……」
「まったく、のび太さんったら……。でも、その風邪じゃどっちみち止めておいた方が良いわね、山登り」
「うん……ごめんね、しずちゃん」
「いいわ、そんな状態で無理される方が困るもの」
（しずちゃんは優しいなぁ……）
（僕がしずちゃんにプロポーズしてからそんなに経ってないけど、接してる感じはいつも通りだもんなぁ）
（返事は保留にされてるけど……）
「じゃあ行ってくるわね」
「うん、行ってらっしゃい。気を付けて、楽しんでらっしゃい」
「ええ、のび太さんも酷くならないように安静にね？」
「うん、ありがとう」
（ああ、行っちゃったか……本当は僕も風邪じゃなかったら行きたかったんだけどな）
「ハックション！」

（うう……体までだるくなってきた……）
（しずちゃんに言われた通り安静にしてよう）

《心配になって来た》
《なにが》
《タイムマシンで調べるとぼくは将来しずちゃんと結婚することになってるだろう。でもね、どうも今のところそんなムードじゃないんだ》
《いや、僕もかねがね不思議に思ってた。あんないい子がなんだってよりによってのび太くんなんかと。もう少しましな男がいっぱいいるのに……》
《言い過ぎだ!!》
《それで念のためその辺の事情を確かめたいっての？分かった。はい、タイムテレビ》
《これがのび太青年》
《パッとしないなあ》
《はあ、君はちっとも進歩してないね》
《なにも言い返せないよ……。見ていられないや。先へまわして》
《あれ!?》
《しずちゃんが1人で……》
《霧で仲間とはぐれたんだよ》
《ど、どうしよう!?助けに行かなきゃ、しずちゃんが危ない！》
《しずちゃんが危ない！》
《しずちゃんが危ない！》
《しずちゃんが！》
《しずちゃん！》
「しずちゃんっ!?……夢？……いや違う、夢なんかじゃない」
（なんで僕はこんな大事なことを今の今まで忘れていたんだろう）
（しずちゃんはこの登山で仲間とはぐれて遭難する）

（すぐに助けに行かなきゃ）
（いや、待てよ……）
（多分僕が行かなくても昔の僕が助けに行くんだよな……）
「……って、バカか僕は！」
（昔の僕がしずちゃんを助けに行ったのは僕が呑気に寝ていたからだ）
（しずちゃんのピンチを知っているのに、今の僕が助けに行かないなんてどうかしてる）
（そうと決まればすぐにでも出発だ）
（とはいえ、雪山に無策で飛び込むわけにもいかない）
「とりあえず世界地図……はダメだね」

（安いレンタカーを急いで借りて、ようやく山の入り口まで来た）
「よし、ここからは徒歩だ。今は君だけが頼りなんだ、頼むぞ……しずちゃんの元に案内して！」
（オートコンパスを両手で握り締めて、祈るように起動させる）
（するとコンパスは山の頂上に向かう一点を指し示す）
「よし、こっちだな。もう少しの辛抱だ、しずちゃん。すぐに行くからね」
（声は届かなくても想いは届けと、まだ見えぬしずちゃんにエールを送り、僕はコンパスの向く方向へと歩き出した）

「おかしいなぁ……歩けど歩けどしずちゃんに会えないじゃないか！」
（山の入り口ではそこまで酷くなかった雪も、登って行くに連れてどんどん酷くなってくる）
「はあ……このコンパス壊れてるんじゃないの？」

（よくよく考えたら、あいつの持ってた”たずね人ステッキ”も的中率は７０％なのに、オートコンパスが正確なわけないか……）
「これじゃあ世界地図持って来たあの時と変わらないな……」
（しかしまあ、だからってがむしゃらに歩くよりはオートコンパスを頼った方がマシだろうし……）
「よし、もう一度だ。しずちゃんのと」
「ねえ君！」
「うわあ!?ビックリしたぁ……」
（オートコンパスに目的地を再入力しようとした時、突然後ろから声をかけられた）
「き、君は？」
（振り向くと、そこには綺麗な白……というより白銀の長髪を靡かせた女の子が立っていた）
（明らかにこの雪山にそぐわない程の薄着なのに、なんでだろう。違和感は感じられない）
（年は僕と同じくらいなのかな？）
「あれ、もしかして私のこと忘れちゃった？」
（そう言って少しだけ首を傾げる姿はすごく可愛らしい）
（確かに、どこかで会った気がしないでもないけど……）
「……ごめん、思い出せないや」
「そっか」
（女の子の少しだけトーンの落ちた声に罪悪感が湧いてくる）
「本当に、ごめんね」
「ううん、私の方こそ。あなたと会ったのはたったの1回だけだし、その日からかなり時間が経ってるもの。それなのに覚えてろってほうがおかしいわよ」
「……」
「ほーら、気にしない気にしない！」
（そうやって気丈に振舞われると、余計に罪悪感が湧いちゃうよ……）
（この子は、１回しか会ったことがなかった僕をずっと覚えていてくれた。それなのに僕は……）

「ふふ、ありがと。あなたは優しいんだね」
（口には出してないけど、顔に出ていたらしい）
「ううん、そんなことない。でも今度は絶対に忘れない。だからさ、もし昔の僕が聞いていたら申し訳ないんだけど、もう一度君の名前を教えてよ！」
（名前。そう、名前を聞ければ僕だって忘れない自信はある）
（リルルだってロップル君だってホイ君だって……みんな、忘れた事なんて一度もないんだから）
（もしかしたらこの子の名前も聞いてなかったのかもしれないし）
（だけど、質問をした途端、女の子の顔が少しだけ曇った）
「私ね……名前がないの」
「名前がない……？」
（名前がないってどういう事だろう……）
（複雑な家庭環境？）
（あまり突っ込むのはやめておいたほうがいいのかな……）
（僕が反応に困っていると、目の前の女の子は急に表情をパッと明るくして、僕をじっと見つめた）
「そうだ！それじゃあ、あなたが私に名前を付けてくれない？」
「うえ!?僕が!?」
「そう。私、貴方に名前を付けてもらいたい！」
（そんなこと急に言われたってなぁ……）
「ユ、ユキちゃんとか……？」
（僕が恐る恐る言った瞬間、女の子は目を点にさせた）
（しょうがないじゃないか！同い年くらいの女の子に名前を付けてあげるなんて経験、そんなあるもんじゃないぞ！）
「プッ……完全に見た目で決めたでしょ！」
「わ、笑わないでよ。それに、なんて言うか、君はなんだか雪がすごく似合うから」
「そっか……。ユキ。ほんとね、確かに私にはピッタリ。ありがとう」
（思わず、女の子……ユキちゃんに見惚れてしまった。本当に嬉しそうな笑顔だったから）

（でも僕には心に決めた人、しずちゃんがいる。だからしずちゃんを……）
「そうだ！しずちゃん！」
（大事なことを思い出した、しずちゃんを探さなきゃ！）
（突然の出来事があったとはいえ、一瞬でも忘れていた自分に腹が立つ）
「ど、どうしたの急に大声出して」
「友達を探してるんだ！」
「友達？」
「うん。ここに登山しに来た友達がいるんだけど、この雪で一緒に来てた子たちとはぐれちゃって遭難しちゃったんだ。だから僕が助けに来たんだけど、僕が迷っちゃってね……どこにいるんだか……」
（なんだかユキちゃんと話してる間に吹雪が強くなってきてるきがする……）
（大丈夫だと思うけど、やっぱり心配だ。早く行かなくちゃ）
（あれ、でもなんでだろう。不思議と息苦しさを感じないな）
「そ、そうなんだ……ごめんなさい……」
「え、なんで君が謝るの」
「ううん、なんでもないわ。それより、あなたをその子の所に案内してあげる」
「え!?場所がわかるの!?」
「ええ、この山のことなら全部把握できるわ。その子がいるのはね……うん、こっちよ」
（そう言ってユキちゃんはスタスタと歩き出してしまった）
（不思議な子だ……）
（オートコンパスも無しで本当にわかるのかな……）
（でも今は信じるしかない）
（待ってろよ、しずちゃん）

「その友達って、どんな子なの？」
（僕の前を歩いているユキちゃんが、振り向かずに聞いてきた）
（それにしてもこの吹雪の中、よく通る声だなぁ……）
「あれ、答えにくかった？」
（答えるのに少し間が空いてしまったからか、気を遣わせてしまったみたいだ）
（答えにくいなんてことはない。むしろ胸を張って言える）
「いや、そんな事はないよ。その子はね……僕の好きな子なんだ」
「……好きな子？」
（ユキちゃんの声のトーンが少し落ちた気がするが、構わず話を続ける）
「うん。僕が小さい頃から、あの子のことが好きだった。僕って何をやってもダメなやつだったんだ。勉強も、運動も、本当に取り柄がなくて。友達にもバカにされたり、親にも先生にもよく叱られたし。でも、あの子は僕をバカにしなかった。励ましてくれた。救い出してくれた。あの子は、僕の生き甲斐なんだ」
「ずっと、好きだったの？」
「うん、ずっと。小さい頃からずっと好きだった。ずっと、僕にはあの子だけだった」
（自信を持って、僕はずっとしずちゃんだけを好きでいて、他の女の子になびいたりなんかしてないって言え……あ……まあ、そうだね）
（……ガールフレンドカタログの件は墓場まで持ってくさ）
「そっか、最初から私に勝ち目なんて無かったのね……」
「……え？」
「ううん、なんでもない。ほら、もう少しでその子のいる所よ！」
（表情は見えないけど、ユキちゃんの歩く背中は変わらない）
（それなのに、さっきまで聞こえていたあの透き通った声は、どこか曇りがかっていた）

（しばらく歩いた後、ユキちゃんが突然立ち止まって一点を指差す）
「ほら、あそこに洞穴があるでしょ。あの中よ」
「ほんと!?よし！早く行こう！」
（そうと分かれば早くしずちゃんの所に行かなくちゃ）
（ここまで案内してくれたユキちゃんのことも、お礼がてらに紹介したいし）
（でも、ユキちゃんの考えは違った）
「うん、その方がいいわね。……じゃ、私はこれで」
「え、なんで？」
「なんでって……私があなたと2人きりでいたって知られたら色々とまずいんじゃない？」
（確かに、プロポーズが保留にされている今、ユキちゃんと2人でしずちゃんの前に現れるのはマズイかもしれない）
「そうかも……。いや、でも！」
「私に気を遣わなくていいわ」
（いや、すごく気遣うよ……）
（でも今のユキちゃんからは、絶対に譲らないぞっていう、なんというか、意固地なオーラを感じる）
「……そっか、わかった。ここまで連れてきてくれてありがとう」
（と、お礼は言ったものの、やっぱりこのままユキちゃんと別れてはいけないような気がした）
「でも、ユキちゃんは一人で大丈夫なの？」
「ええ……私は、ここに住んでるようなものだから、問題ないわ」
（だけどユキちゃんには、はっきりと断られてしまった）
（ユキちゃん自身がそう言うなら、きっと大丈夫だよね）
（それに、僕がまたここに来れば二度と会えないなんてことはないだろう）
「そっか……わかった。本当に色々とありがとう。今度また、お礼させてね」
「……ええ、そうね。また、いつか会いましょう。……また貴方に会えて、嬉しかったわ」

「うん、僕も会えてよかった。次は絶対にユキちゃんのこと忘れないから、また会おうね！」
（そう言って笑顔で手を振って別れを告げた）
（二度と忘れないぞと）
（きっとまた会いに来るよと）
（そんな思いを込めて手を振った）

（だけど僕は、もう二度とユキちゃんと会うことはできなかった）

春を見てみたい
それが私の夢

あの日あの時
君には春が来た
私が消えたから

これからきっと
君には春が来る
私が消えるから

春を見る方法は1つだけ
私が消えればいい

消えるのはもう慣れた
毎年(いつも)のことだから

それなのに

消えるのがすごく怖い
初めてのことだから

春を見てみたい
それが私の夢だった

「のび太さん！来てくれたの!?」
「ああ、よかった、本当に無事で良かったよしずちゃん……」
（しずちゃんの姿を見た途端、安心してへたり込んでしまった）
（本当に僕はここぞと言う時に男らしくないな……）
「もう、大袈裟ねのび太さんは。……でも、よく1人でここまで来れたわね。この岩穴、オートコンパスにはインプットされてなかったんだけど」

「う、うん……僕のコンパスにも無くて道に迷ってたんだけど、えーと、偶然ここを見つけたんだ」
（しずちゃんに嘘をつくのは心が痛いけど、折角ユキちゃんが気を遣ってくれたんだ）
（その気持ち、無碍にはできない）
「でも、こんなことになるなんて思わなかったわ。天気予報じゃここまで降るなんて言ってなかったのに……ってあれ？のび太さん、吹雪が止んでるわ！」
（洞穴の入り口を見ると、確かに吹雪が止んで、日の光が差し込んでいるのが見える）
「ほんとだ、これなら下山できそ……ハックション！」
「大丈夫!?そういえば朝は酷い風邪だったじゃない！まだ全然治ってないんじゃないの？」
（本当に優しいな、しずちゃんは）
（まだプロポーズの答えは聞けてないけど、結果がどうであれ僕の好きな人であることには変わりない）
（そんな相手を心配させるわけにはいかないね）
「あはは、大丈夫大丈夫。多分寒いのは風邪のせいじゃない。きっと……

……雪のせいだよ」

おばあちゃんのおもいで

《ねぇのびちゃん。ダルマさんてえらいね》
《なんべんころんでも、泣かないでおきるものね》
《のびちゃんも、ダルマさんみたいになってくれるとうれしいな》
《ころんでもころんでも、ひとりでおっきできる強い子になってくれると……》
《おばあちゃん、とっても安心なんだけどな》
「……っ!?」
「……夢……か」
（枕元に転がっている時計を見ると、既に１０時を回っていた）
（休日にこんなに早く起きるとは……）
（久しぶりに見たおばあちゃんの夢）
（あれから……おばあちゃんが死んでから、５年ほど経つだろうか）
（こんなにも時が経っているのに、忘れられない）
（５年も経ったのに、記憶の中のおばあちゃんを想い出す度、心が苦しくなる）
（夢のせいですっかり目が覚めてしまった）
「そういえば……」
（寝起きのくせして冴えた脳みそが、僕のわずかな記憶を引き出してくる）
（その記憶を頼りに僕は、布団から抜け出した）

「やっぱりここにあった!!」
（記憶を頼りに溜まった物置の中を漁ると、お目当ての物を見つけた）

「ひゃあ。なつかしいなあ」
（僕は思わず、見つけたそれを抱えて感嘆の声をあげた）
「何かいいものでも見つけたの？」
（ドラ焼きを買いにでも行ってたのだろう）
（ちょうどドラえもんが帰ってきた）
「小さいころ大好きだったくまちゃんだよ」
（僕の昔のお友だちを、今の親友に紹介する）
「つぎだらけだなあ」
「おばあちゃんが、つくろってくれたんだ」
（今はもうボロボロだ）
（原因は長い間物置にしまわれていたせい……というだけではない）
（一番好きだったぬいぐるみだから、いつも一緒にいた）
（いつも一緒にいたから、落としたり引っ掛けたり）
（その度におばあちゃんにわがままを言って直してもらっていた）
「おばあちゃんがいたの？」
「ぼくが幼稚園のころ、死んじゃったけどね」
（ドラえもんが知らないのも無理はない）
（僕が小学校に上がる前だったからな……）
「この人だよ」
「だっこされてるのが、のび太くんだね」
（僕の自慢のおばあちゃんを見せるためにアルバムを開いた）
「優しそうな人だ」
「僕のこと、すごくかわいがってくれてね」
（不思議なもので、アルバムを開くと忘れていたと思っていた思い出が次々と蘇る）
「ジャイアンとスネ夫にいじめられて泣いて帰った時も、真っ先に慰めてくれたし……」
「おねしょして泣いた時も真っ先に来てくれたのはおばあちゃんだったし……」
「遊んで窓ガラスを割っちゃってママに怒られて泣いた時も、おばあちゃんは庇ってくれたし……」

「大きい犬に追いかけられて怖くて泣きながら逃げてた時も、おばあちゃんはすぐに来て追い払ってくれたし……」
「おばあちゃんは本当に僕に優しくしてくれたんだ」
「アハハ、のび太くんはそのころから泣き虫だったんだね」
（たくさんのおばあちゃんの優しかったエピソードを話したつもりだったのに、こいつに伝わったのは僕の泣き虫エピソードだった）
「僕は、おばあちゃんが優しかったという話をしてるんだ。もっと、素直に聞け！」
「悪かったよ」
（いや、間違っちゃいないんだけどさ……）
（……）
（……）
「グズ……」
「う……う、う。」
「わ～～～～～!!!!」
（そんなつもりはなかったのに、涙が溢れてしまう）
（ドラえもんに説明しているうちに、僕は思い出してしまった）
（優しかったおばあちゃんを）
（まだ生きていた頃のおばあちゃんを）
（そしてもう2度と、おばあちゃんとは会えないという事実を……）
「もういちど、おばあちゃんに会いたいよう！」
「そんな無理は……」
（無理なのは分かっている）
（おばあちゃんが死んでからもう5年も経とうとしているんだ）
（会えないのは分かっ……）
（いや、まてよ）
「そうだ!!タイムマシンで、昔へ行けばいいんだ!!」
（なぜ今まで思いつかなかったのか！）
（普通の人ならあり得ない）
（だけど僕にはタイムマシンがある）

（よし、思い立ったが吉日だ）
「まて。そりゃ、やめたほうがいいぞ」
（焦るように机の引き出しに足をかけたとき、慌てたようにドラえもんが僕を引き止めた）
「どうして？」
（一刻も早くおばあちゃんに会いたい僕は、言葉に力が篭る）
「いきなり、大きくなった君を見たら、おばあちゃんはどう思う。びっくりして、ひっくりかえるぞ。年寄りだから、悪くするとそのショックでぽっくりと……」
「よく、わけを話せばいい」
『タイムマシン』なんて、分かるもんか」
（確かに、当時のおばあちゃんはかなりの年だった）
（それに、最初は僕でさえ理解できなかった『タイムマシン』をおばあちゃんに説明するのは難しいかもしれない）
「で、でも……でも、でも」
（でも、やっぱり会いたい）
（思い出してしまった今、ひと目でもおばあちゃんの生きている姿を目に焼き付けたい）
（そうすれば、この悲しみも和らぐかもしれない）
「そうだ！こっそり顔を見るだけならいいだろ。な？どこか、物陰に隠れて。さ、行こう！」
「気が進まないけどな」
（乗り気ではないドラえもんに妥協点を無理やり押し付けて、強引に机の中に押し込んだ）
「ぼくが三つくらいの時代へ行こう。それ、出発だ！」

「出口が見えてきた」

（どこまでも続く時空間の先に、この空間に似合わない柔らかな自然光が差し込んでいる）
（あそこが僕たちの目指す場所）
（タイムマシンを停めて、光の中へと身を投じる）
「わあ、なつかしいうちの庭だ」
「あっ、柿の木！一昨年に切っちゃったんだ……」
「家もまだ新しいや」
（目の前には懐かしい風景が広がっていた）
（まだ5年ほどしか経っていないのに、こんなに景色は違うものなのか……）
「だれかに見つかるとまずい。はやく、おばあちゃんを見よう」
「ああ、そうか」
「裏口から忍び込もう」
（ドラえもんに急かされて音を立てないように家の中に入る）
（……なんだか悪いことをしている気分だ）
「おばあちゃんがいつもいた部屋はあっちだよ」
（家の中は間取りこそ変わっていないが、置いてあるものや場所が所々変わっていた）
（中には懐かしいものも置いてあり、視界に入るもの全てが懐かしい）
（そうしているうちに、おばあちゃんがいつもいた部屋の前に到着する）
「いいかい、そうっと覗くんだ」
「う、うん」
（鼓動が早くなる）
（もう会えない、と思っていたおばあちゃんをもう一度、この目で見ることができる）
（手に滲む汗を宥めながら、ゆっくりと扉を開ける）
（おばあちゃん……）
「……あれ？いないよ」
（部屋の中は空っぽだった）
（どこか別の部屋にいるのだろうか）

（期待していた分、少し拍子抜けしてしまった）
（でも、どこかしらにはいるだろう）
（別の部屋を見てみよう）

「はあ……おばあちゃん、いないね」
（おばあちゃんは洋間にも2階にもいなかった）
（きっとどこかへ出掛けているんだろう）
（家中を探していたせいで昔のママに見つかって追い出されてしまった）
（追い出されてから、近所をフラフラと歩いているがなかなか見つからない）
（見つかったのは幼い時の僕と、僕をいじめていたジャイアンとスネ夫だった）
（あいつら、昨日も学校で僕をつっころばしたんだ）
（幼い時のジャイアンとスネ夫には代わりに痛い目に遭ってもらった）
（さすがに少しみっともなかったかな……）
「ねぇ、もう見つからないよ。帰らない？」
「せっかく来たんだから、もう少しだけ！」
（さっき買ったどら焼きを食べたいのか、最初から乗り気ではなかったドラえもんはすぐにでも帰りたいみたいだ）
（でも、僕は諦めきれない）
（一瞬だけでもいい、おばあちゃんに会いたい）
（そう思ったその時、ひとつの影が向こうからゆっくりと近づいてくる）
（少しだけ曲がった背中のせいで今の僕と大差ない、小さめの背丈）
（シワが多いけど、優しい顔立ち）

（出かけるときにいつも持ち歩いている小さな巾着袋）
「お……おばあちゃん!!」
（アルバムの写真と全く同じおばあちゃんが……）
（もう二度と会えないと思っていたおばあちゃんが……）
「生きてる……歩いてる……！」
（やっと会えたのが嬉しくて、涙が止まらない）
（感動からか僕は、自然とおばあちゃんの後をつけていた）
（ちょうど家に帰るところだったらしい）
（おばあちゃんが家の中に入ろうとすると、昔の僕がおばあちゃんに向けて飛び出してきた）
「おばあちゃん、花火買ってきてくれた？」
「ごめんよ。町中のおもちゃ屋さんを探したんだけどね。花火は夏しか売ってないんだって」
「いやだい、いやだい！花火が欲しいんだい！おばあちゃん嫌いだ！あっちへ行けっ！」
「はいはい」
（なんてことだ！）
（おばあちゃんに向かって無理難題なわがままを言った挙句、『おばあちゃん嫌いだ』なんて！）
（いくら僕でも許せん！）
「こら僕！おばあちゃんをいじめるな！」
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!」
（僕が少し声を荒げただけで、幼い時の僕はすごい声で泣き出してしまった……）
（自覚はあったけど、こんなに僕は泣き虫だったのか……）
「どうしてうちののび太を虐めるんです！」
（泣き虫の僕にアタフタしていると、泣き声を聞いた昔のママが駆けつけてきてしまった）
（どの時代に来ても、ママに怒鳴られるのは怖いな……）
（それでもこのまま怒られているわけにもいかないので、弁解を試みる）

「あ、あ……あのですね。こ、これには深いわけが……じ、実は、僕のび太だよ」
（自分でも馬鹿な弁解だなぁと思うが、焦りからか言いたいことをまとめられない）
「のび太はこの子よ」
「いや、そうじゃなくて……僕……『タイムマシン』で……」
「かわいそうに。頭がおかしいのね」
（ママの怒りの顔は、段々とかわいそうな人を見る目に変わっていった）
（結局、頭のおかしい人と思われてしまった……）
「それみろ、信じてくれるわけがない。帰ろう」
（確かに、ドラえもんの言う通りだ）
（頭の悪い僕がどんなに説明したところで、信じてくれるわけがない……）
（生きているおばあちゃんをひと目でも見れたんだ）
（目的は果たしたんだ）
（……）
（でも……）
（でも!!）
「もうひと目だけ……」
（僕は我慢ができずにもう一度、裏口から家の中に入った）
「さっきの変な子がいるよ!!ママ!!」
（侵入してすぐに昔の僕に見つかってしまった）
（慌てて思わず、一番近くの部屋に逃げ込んでしまった）
（その部屋の中には、僕がもうひと目だけでも、と願っていたおばあちゃんの姿があった）

「ありがとう」
（部屋に逃げ込んだ時、最初こそ驚いた顔をしていたけど、おばあちゃんはすぐに僕を匿ってくれた）
「おばあちゃんは、僕のこと怪しまないの？」
「いいえ」
（すごい人だ……普通だったら怪しんだり通報したりするのに）
（そんなおばあちゃんは今、僕の大好きだったくまちゃんを繕っている）
（その表情は、いつも僕に見せてくれていたのと同じ、優しいものだ）
（しばらくの無言の後、僕はゆっくりと口を開いた）
「おばあちゃん。のび太くんがかわいい？」
「ええ、ええ、そりゃもう」
（自分で聞くのは少し恥ずかしい質問だけど、おばあちゃんのその答えは僕の心を暖める）
（だけどその直後、おばあちゃんの表情が少しだけ陰った）
「いつまでも、いつまでも、あの子のそばにいて世話をしてあげたいけど、そうもいかないだろうね。わたしももう、年だから」
「そ、そんな寂しいこと、言わないでよ……」
（もしかしたらこの時にはもう、おばあちゃんはおばあちゃんなりに自分の最期が近いことを悟っていたのかもしれない）
「せめて、小学校へ行くところまで、生きられればいいんだけどね。ランドセル背負って、学校へ行く姿……ひと目見たいねえ」
「ちょっと待ってて！」
（おばあちゃんの願いを聞いて、考えるより先に自分の体が動き出していた）
（信じてもらえるかはわからないけど、『ランドセル姿ののび太』なら僕が見せることができる）
（急いでタイムホールのあった場所に戻ると、タイムマシンが残されていた）
（ドラえもんは先に帰ったみたいだけど、タイムマシンは置いていってくれたみたいだ）

（なんだかんだ言って良いやつなんだよ、あいつは）
（急いで元の時代の自分の部屋に戻ってきた）
（案の定、ドラえもんは僕の部屋でどら焼きを食べている）
「ランドセル！」
（そんなドラえもんにランドセルを要求して、急いでおばあちゃんの元に帰ってきた）
（ランドセルをしっかりと背負って、今度は庭から直接おばあちゃんの部屋に入る）
「信じられないかもしれないけど。僕、のび太です」
（突拍子がない）
（それでも、信じてくれることを信じて、おばあちゃんに打ち明けた）
「やっぱりそうかい。さっきから、なんとなくそんな気がしてましたよ」
「信じてくれるの!?疑わない!?」
「だれが、のびちゃんの言うこと疑うものですか」
（ありえない、普通ではありえないはずなのに、おばあちゃんは僕を信じてくれた）
「おばあちゃん!!」
（嬉しくて嬉しくて、おばあちゃんの膝の上でまた泣いてしまう）
（この泣き虫は本当に治らない）
（だけど今はいいだろう、本当に嬉しいんだから）
（嬉しさに浸っていると、僕の頭を撫でていたおばあちゃんが軽快に口を開いた）
「のびちゃんの小学生の姿を見たら、欲が出ちゃったよ。あんたのお嫁さんをひと目見たいねえ」
「お嫁さん……ちょっと待ってて、おばあちゃん」
（僕はまだ結婚はしていない）
（だからおばあちゃんのお願いを叶えることはできない）
（だけど、最大限おばあちゃんにしてやれることはしてあげたい）
（それなら……）

「しずちゃん、この人が僕の会って欲しい人だよ」
「えっと……こんにちわ、はじめまして。源　静香といいます」
「静香ちゃん……なるほどね」
（しずちゃんの名前を聞いて、一瞬だけ僕に目配せしたおばあちゃんは何かに納得したように笑顔を見せた）

『会って欲しい人がいるんだ。その……訳あって、理由は聞かないで欲しいんだけど……とにかく、少し付いて来てほしいんだ』

（僕が言えたのはただそれだけだった）
（真剣に頼んだのが良かったのかもしれない）
（不思議そうな顔はしていたけど、それでもしずちゃんはついて来てくれた）
（タイムマシンに乗ったり、昔の僕の家に侵入したりと聞きたいことは沢山あったろうに……）
「……そうかい。面影が、残ってるね。はじめましてではないけれど、よく来たね」
（おばあちゃんの言葉に、しずちゃんはあまりピンときていないようだ）
（しずちゃんとおばあちゃんの接点はそこまで多くなかったから、そこはしょうがないだろう）
（ただ、ここが昔の僕の家だということは分かっているはずだから、なんとなく察しはついているんだろう）
（その上で何も聞かないでいてくれている……優しい子だよほんと）
「将来は美人さんになるんじゃないかと思っていたわたしの目は正しかったみたいだね」
（おばあちゃんはしずちゃんと僕のことを交互に眺めながら、満面の

笑みを浮かべている）
（きっと僕の言いたいことを察してくれているのだろう）
（やさしかったおばあちゃんはいつもそうだった）
（泣き虫だった僕の、言葉にならない言葉をいつも理解してくれた）
（僕が伝えたい言葉はきっと、今でも伝わるって確信してる）
（それでも、おばあちゃんに正しく伝わるように、僕の想いを理解してもらえるように、おばあちゃんの両の手を自分の手で包んだ）
「おばあちゃん……今はその、まだ言えないんだけど、僕……僕、頑張るから。頑張って、勉強も運動も頑張って、立派な大人になるから……おばあちゃんの自慢の孫になるから……だから……だから……」

「おばあちゃん、僕のおばあちゃんでいてくれて、ありがとう」

（なんでずっとおばあちゃんに会いたかったのか……ようやく分かった）
（それは、僕の中に心残りがあったから）
（たくさんのおばあちゃんの優しさに、僕は何もお返しが出来なかった）
（それでも最低限これだけは絶対に、言わなきゃいけなかった）
（それなのに、幼かった僕は伝えられなかった）
（その心残りを、5年経った今、ようやく伝えることができた）

「のびちゃんはずっと、おばあちゃんの自慢の孫ですよ」

（おばあちゃんならきっと、そう言ってくれると思ってた）
（でも、僕はその言葉に甘えてちゃいけない）
（ドラえもんが来てから、僕の未来は変わった）
（だけど、それでも未来はすぐに、容易く変わる）
（だから僕は、願った未来を勝ち取るために頑張り続けないといけない）
（すぐに転んでしまうようなダメな僕だけど、何回転んだってぼくは

起き上がれるはず）
（時間はかかるかもしれないけど、起き上がる方法も知ってるし、起き上がる力も持っているんだ）
（ありがとう、おばあちゃん）
（おばあちゃんのおかげで、僕は強くなれてる）
（これは僕の、僕だけの一生の宝物）
（これが僕だけの）

『おばあちゃんのおもいで』